



莊子繪鈔
貞

□ 13
1898
4 止



西 〇七三
1898
4止

莊子繪抄卷之貞

皇京

菊丘臥山人江匡弼文坡拙解

外篇山木第二十

山木の篇號ハ莊子山中に行て大木の枝葉盛茂ク孤見ル木孤伐者其旁小止つて取ど其故を問ハ曰此木用る所なくといハ莊子の曰此木の材多ク孤以て其天年孤終ると孤得たりとい夫より莊子山を出て故人の家小舎ニ休足故人喜ひて堅子に童僕命しつて雁を殺して是孤身以て饗應といハ堅子主人小まうといハ雁二羽の中ハ一羽ハ能鳴る二羽ハ鳴ざる多矣をう殺さん主人の曰その鳴ざる雁を殺せといひけまハ其鳴ざる雁を殺て郷食應たり明日弟子莊子小問て



上三子會女

卷之貞

一

曰。昨日の山中の木は不材ゆゑに以て其天年以終る。今故人の雁は不材ゆゑに殺さる。先生將小何を以て處むと。莊子笑て曰。我の夫材と不材との間不處むと。材と不材との間を以て似るも非なる。故小未と累いと免むと。

右の二章は首に書出と。是材ありと。材なきと。中道小莊子。處むと。處むと。不才との間小居ることあり。然るに佛家。中道實相の場小似る。亦も莊子其場を實小得と。故小未と累いと免れどもあり。猶この篇に直木は先伐と。井井は先竭ぬ。故どの金言は多く説く。又孔子陳蔡の間小窮らと。七日火食せざる。公舉て種々の詐論あり。又莊子彈弓を執て異鵲を伺ふ。

蜩のり。大樹の蔭小其身以忘とて。螳螂の後を搏むと。知らむ。鵲この螳螂を取むと。後小彈弓を以て射る事以忘とる。

この事以て世の人の利欲小其身命を忘る。以戒む。

莊子曰。陽子姓陽名朱。宋の國小行て。逆旅小宿る。以逆旅の内小妾

二人あり。其一人は美し。一人は悪し。其悪る女貴中とて。美女は人小賤らば

陽子その故に之のけむ。逆旅の小子對て曰。其美女は自我美し。と身

揚るも。我等は美女とや。おのひをせぬ。又女の悪女は自ら顔が醜

悪し。おのひをせぬ。我等はわの人を悪女といひ。ひをせぬ。答はれ

陽子曰。弟子ども。是を以て記かけ。賢を行ふて。自その賢とするの

行を去らば。安小往とて。人小愛せられ。うんとつり

外篇田子方第二十一

田子方魏の文侯小侍坐せりと書出せる瓜篇號とと此意瓜爰小く
説つ魏の國小姓田名無擇字瓜子方と賢人ありて魏の國主文侯
の旁に侍り坐して數小給工と賢人ありやりの大徳ありと
文侯給工が事を言上時小文侯の曰汝毎度我前出とと小給工
賢なる徳を稱し讚尚ぶ其給工する者ハ汝ガ師なるや田子方曰名
臣師小非と臣ガ里人あり道を説と數理小當瓜以て臣ありと
稱美つとととせ文侯の曰汝小師匠ハかきやと子方曰臣
臣師小文侯の曰汝師誰ありと子方曰東郭順子とまり
と人臣師あり文侯の曰汝も汝の師ハ順子ガ事ハ何レ人稱美シ

我小告さると子方曰その臣師と順子とまり人ハ眞の道人
なり貌人ありとまりも其心ハ天あり自然小契多自然小契多眞虚
にあて万物小縁ハ眞一瓜葆清淨小して然も淨不淨の万物瓜
容る無道の物あり我容を正くして彼を悟らせる正道小導く故
小無道の人の邪意を消除とまひ是の如き我師の深玄眞一小契
ひハ盛徳小てごと臣無擇と瓜の庸の者の口にて何レ其
盛徳を稱美し盡さとませるやとまりて出去けと文侯儻然と
わととまり終日言と叔御前小在る侍臣瓜召て是小語て曰東郭
順子誠小全徳の君子あり我初昔學文を修せ時先王聖
智の言周公孔子の仁義の行を用て理を窮るの至極と爲と今

子方師の説は始て聞ふ其道真に契ひ深甚靈妙なり我今も孤
聞て形解て動も欲せども餌つて言も欲せども我今も學
びし所の真ふ土梗なりとつり

右の土梗の土細人の人形を以て文侯の學びしもの真の物でなし土人
形ふて雨小逢へ壞と落せば破るが如き無益の事なりと自前非だ
悔てまうささしめり猶此篇中に温伯雪子齊小適て魯に舍
と居小魯人見へんを以て請とふに詔して禮義の非を辨し孔子
路顔淵老聃等の聖賢を寓言して道を辨論し列禦寇伯昏
無人を爲小射る等の事以寓言して道の要を辨と詳小是を
擧て解とることを以て可めりき小詳ふとることを何篇小於ても

能せど唯其篇ごとの大意を擧て解とるを要とすきあり

外篇知北遊第二十二

知北遊の篇号は知北玄水の上小遊ぶ隱存の丘小登つて適ふ無爲謂
に遭ぬと書出せり以てなり此章中に載るる人の別して假設けりて
無人なり唯黄帝の寓言小あり此篇真の靈言を説示と事甚
だ詳なるを以て其の畧を解と看ぶべし

道を爲者日々損と損して又それを損て以て無爲小至る無爲小
て爲るといふことなり下略損と人損とを如く又器物多小の損へし
徒あり徒と徒伴あり死の始なり生死と終始と誰り紀綱を知らむ人の生
氣の聚るなり聚るは生と爲散るとは死と爲と若死生を徒と爲は五口又

何を患へむ故小萬物一なり。是を其美とする。故神奇と爲す。其惡所を
 眞腐と爲す。眞腐と爲す。化して神奇と爲す。神奇復化して眞腐と爲
 す。故小天下に通じて一氣の聖人故小公貴ぶ。

右の數言の解を小郭象が注し。唐の西華法師玄英が疏し。
 雜て其略意を述ぶ。述ぶの愚意は唯是の神仙の至教小第一
 義とする。眞の旨は曉る。故以てなり。生死の徒死の生の始と
 終より再び元小其略意を述ぶ。

生死の徒死の變化の道は知る者。以て異つと爲す。死の生の始
 め。孰く其紀を知らむと。更死と爲す。人の始と相爲すと則未だ
 孰く死いづと生あること。故知らむと。疏曰。氣聚して生る。猶是死

の徒類なり。氣散して死を猶是生の本始めなり。生死終始めの誰
 紀細を知らむ。聚て散。往來て變化して定まらば。本文曰。人の生る氣は聚
 るなり。聚るもまた生と爲す。散ると死と爲す。注曰。俱小是聚るなり。
 俱小是散なり。本文曰。若死生を徒と爲せば。吾又何を患む。注曰。患む
 は異なりとす。生るを。疏曰。夫氣聚るは生と爲す。散ると死と爲
 す。聚散の異なりと雖も。氣は爲すこと同一。今斯死生聚散を徒
 伴と爲す。徒伴は死も生も是。既小其別方ること。一と爲すと。何乃
 憂るわらん。本文曰。故小萬物一なり。疏曰。生死既小其二。わらば。萬物の
 理當に一。故とす。本文曰。是其美とする所を。神奇と爲す。其惡と
 す所を。眞腐と爲す。眞腐復化して。神奇と爲す。神奇復化して。

真腐と爲る。故に天下に通じて一氣の注。日人各美とする所と以て。
 神奇と爲る。惡し所を真腐と爲るもの。然とも彼が美とする所の。
 我惡とする所あり。我美とする所へ彼が惡とする所故に通じて共し神奇
 なり。通じて共し真腐なるものと死生彼我豈殊あるんや。疏云。夫物に美
 惡無くて情に向ふ。背ぬあり。故に情の美とする所の者。謂て神奇奇特
 と爲る。情の惡所の者を謂て腥臭腐敗と爲る。顛倒迷執。此斯人
 至る。然るも物性同トウ。好むところ各異なり。彼が美とする所を此
 に惡と爲る。此に惡し所を彼が美と爲る。故に毛嬙麗姬と云ふ女は美
 人かきども。魚は是を見て淵の底に深て入。鳥は見て高く飛去。斯則真腐
 神奇にして。神奇は真腐なり。是是非美惡。何と定む。とわん。是

小知るぬ。天下の萬物。同しく一和氣の。本文曰。聖人故に孤貴ぶ。疏曰。夫
 体道の聖人の智萬化。小周る。故に此真一を貴びて。而して萬境に冥同とす。
 右疏。小玄英西華法師。二を貴ぶ。と。真一を貴ぶ。と。文長れ
 後略と

雜篇庚桑楚第二十三

此篇號の首。小老聃の役。後明人。小如。庚桑楚と云ふ者あり。偏に老聃の道と
 得る。り。書出せる。以て。前の外篇の號。多く。最初の文字。以て。と。
 譬。言。至樂。達生。知北遊の類の如し。然る。小雜篇。ふ。此。庚桑楚。と。讓王
 と。次。血跡。と。說劍。と。漁父。との類。右の如く。文中に。ある。文字。以て。篇号
 とす。此篇の中。に。老子。と。庚桑楚。と。南榮趯。との事。孤高言。と。長文

かる論する所。凡南榮越老子に生を衛する守りの經を經常聞ひの
 こと。老子の曰衛生の經能一を抱る。注曰其性を離ど。疏曰真と守て。
 二のうと。此類ゆて天子天民天門天人天和又至禮至義至知至
 仁至信を諭し。無為真一の旨を述ぶ。此篇小人の解し易くして。
 人の解し難き説の更み故事。又面白く。談もかけき。爰に本文を略す。

雜篇徐無鬼第二十四

徐無鬼と篇号と。此篇の首に徐無鬼女商小曰て。魏の武侯見
 ゆし書し紙以てかり。徐無鬼の隱者の名。姓徐字無鬼。女商魏の宰臣。
 徐無鬼武侯を諭さんと。狗と馬と狐相とる義を説。又戰鬥の事と述
 へ。黃帝大塊を具茨の山小見へんと志て。七聖塗小迷ひて。牧馬の童子

小問。童子天下狐爲じり事を馬狐牧とるに比して説ゆ。小黃帝
 童子。天師と稱ど。又知士弁士察士。招世の士。中民の士。筋力の士。勇敢
 の士。兵革の士。枯槁の士。法律の士。禮教の士。仁義の士を擧て辨じ。又管
 仲病あり。桓公の問小因て道を説。又南伯子綦と。顔成子と。孔子と。孫
 叔敖或の齒缺と。許由。又堯舜と。狐寓言して。真人の義を述。藥桔梗
 雞壅猪苓等。狐擧て。藥病相當の理を以てし。越王勾踐の事。狐
 説と。或は大。大陰。大目。大均。大方。大信。大定の七大を知る。狐要ととる
 事を説あり。此篇の中。小龍の事あり。

莊子葬を送りて。惠子が墓を過り。顧て從者小謂て曰。郢の人。熱
 都。聖ふて。其鼻端を漫と。其鼻端へ微とつづる。聖の微。計かきと。



蠅の翼二とりはさるる若し。やがて匠石とて大工の名人居やうしてけし
 の野人匠石小對ひ。我鼻端小堊がついてわらう匠石が曰くふもをさる
 鼻の端小堊微しはさるるやう其儘小志て居や我等この持
 る。介介の斧を以て斲墜ちてやらふ。夫れわび多し其斧て鼻柱とも
 墜してしるふ。テ氣遣ひあるか。詞の下より。手小持所の斧と
 運して風といふとも。思ふ中に鼻端の堊盡り墜て鼻小少し傷
 けり。野人の立て容も失くさず。誠小斲も斲ら。斲ちも斲ちと
 此事あるべし。時小宋の元君此事を聴し。彼匠石を召て曰く
 の方へ斧を以て野人の鼻の端小附する。堊を斲墜したる。聞
 及ぶ。嘗試小寡人。寡人小宋の元君。爲小これを爲て見せよ。匠石

頓首して曰御意か。と仰り奉まとも臣が質て死しはてり久しく
 ありまを。私彼鼻の端小附する。堊を斧を運して斲し。野人の
 身の。そのか。よ。し。依て鼻に傷はけを。彼堊を斲ち。し。只
 今小て。彼質死てより。久しく。吾質ふる者も。久く。吾與
 に。これと言ひ。ものも。か。し。と。い。ふ。は。し。
 右の一章は。莊子親知の葬。送る時。惠子と。い。ふ。我道。孤
 談合ふ。親友の墓の前。孤過ぎ。て。緬小疇。昔の惠子。が。事。と
 懐ひ出。して。此野人と。匠石との事。孤寓言し。懐舊の情。と
 述ぶ。なる。と。伯牙。が。琴。を。破。り。絃。を。絶。し。鐘。子。期。が。孤
 以て。あり。思ひ合。と。い。ふ。

雜篇則陽第二十五

此篇号も發端小則陽楚小游ぶ陽ハ姓を諱つひ名をい夷節夷節ハ楚の臣陽字小則陽とつた人也

楚王の人と爲つた孤述て依て道孤論ト爰小魏の惠王名ハ望下多クと書出とふ因て多り扱この續

と齊の威王名ハ辛とつた相公の子田祖の後多ク故小田侯年とつたと共小約折言て兩國相征伐を親

好らんと盟て間もかく田侯卒盟小背し魏の惠王大不怒と

人孤密小つて田侯を刺殺んと時小將軍孫行を聞き

て曰萬乘の君として仇を報ゆるに匹夫孤遣り彼を刺殺さ

ゆんと君の爲べき事にわくも某小軍勢二十萬孤多まつた齊の

城を攻て其人民を虜し牛馬孤羈係き勲功ある孤賞し軍兵お

分ち布つた齊の田侯恚怒て熱氣心を蘊つた雍疽背に發して亡ひ

ひし時小魏の賢臣季子は是孤聞て譬孤設けて諫て曰夫十伍の城と

築く小功を用る事多くして城成就と然ら孤事なら是と壞

昏靡ハの役の人を辛苦とる所多り今魏の國兵陳于戈を用ひら

こと七年この間小武を偃文を修しは是王者の洪基多り然ら孫衍

みろとに軍を起さんとは是禍亂を爲と人多り聽へとは

と時小魏の賢臣華子はこれを聞て曰善齊の國を征伐しは者ハ亂

人多り禍亂をまひく善伐とはかきとは者も亦亂人多り是孤伐と伐

ざるとはも共小亂人なるもの者も又亂人多りと魏の惠王の曰と

らば若何せん華子曰君其道を求めんの

めくとも。魏王の曰がらるる然とや。戴晋人が曰通達の國れ中に魏
 の國あり。其魏の中に梁の國あり。昔河東小直國を魏と號と魏の強秦の爲
 逼らきて徙て梁の國不都と魏梁は若ゆふ魏の中
 小梁あり其梁の中小於て王あり。其王と王とい魏
 王をい蠻氏と。蠻氏は今つあり弁と
 わらんや。別々としてかして。魏王の曰別々として
 かして。是は於て魏王悟を開て戦ひを止らして。是を世小蝸牛
 の角れ争ひとい。譬の兩頭の蛇。兩頭の鳥の喰合ふが如く。瓜の
 争ひ。魏と齊を争ひ。非を今。の世も多くあり。慎ぜしむ
 外物に必ととんぐ。故小龍逢誅。比干の戮。箕子の狂
 也。惡來の死。桀紂の亡。と書出せる。孤篇号と。夫人間の事物

雜篇外物第二十六

矣。多差ふして。萬緒を安から。大順ある則に。虚通あり。若其物遠
 くて。情を執ると。死に必と禍害小遭なり。譬の龍逢比干の君に諫
 て。忠義を盡し。多し人あり。誅戮せらる。箕子の諫め。君の用ひ
 ざるを見て。佯と狂人ありて去る。惡來の紂王の佞臣かとも死し。桀王
 紂王の俱小亡ふ。是皆その我執着と。一心以て害ひを招く。故小次
 に。任や。長弘が事。公舉て。其事を辨と。此篇小莊子要を監
 河侯監河侯の魏
 丈侯をい小代負事。任公子。大魚。孤釣と。老萊子が弟子。孔子
 に遇ふこと。宋の元君。神龜。孤夢見ること。惠子。莊子。孤子。言用。所
 かしての事。堯許由。小天下。孤與ふ。許由。逃る。湯王。務光。小天下。孤
 與ゆと。務光。と。孤怒る。等の事あり。其中に

莊子家貧多故。往て粟以西秦監河侯魏文侯小貸。監河侯の曰諾。諾、意得。我まさら。年の終ふ多。百姓の租賦封邑の物以得。子小金三百兩貸べ。然ら可ら。莊子忿然と志て。色を作へて曰。周莊子昨來。中道ふて某以志。呼ぶ者あり。某顧て視。車の通。車轍の中に鮒魚が有。ゆ某彼ふ問て曰。鮒魚。魚ふてい。何爲して。小居や。鮒魚對て。我東海の波臣。波臣と口義。波臣とあり。君豈斗舛の水わ。以て我を活くらんや。某曰。諾。我や。南方吳越の王。小遊て。右の難義を。まう志て。西江の水。以激で。子を迎へん。まじ。彼鮒魚忿然と怒て曰。我湖水。小離。是の如く困。雖も。今遙小遠。湖水。求めど。

先少に斗舛の水を得。活へ。月日以徑て。吳王越王。小言上。西江の大江。我以迎へん。君さ。や。無功。以言。我を枯魚の肆。小て。素めら。ま。と。

右の一章。鮒魚の車轍の中に困。以て。莊子。身の上を譬。て。監河侯を。念て。諭。を。是も。寓言。小て。わり。事。小て。い。か。

雜篇寓言第二十七

此篇号。即發端。小曰。寓言。十。小志。九。重言。十。小志。七。卮言。日。小出。和。小。天倪。を。以て。書。出。せ。其。の。寓言。と。事。世。の。人。普。く。莊子。以て。寓言。と。或。本朝。の。源氏。物語。方。以。寓言。と。言。と。寄。た。り。寄。松。の。木。に。梅。の。木。に。寄。て。生。じ。る。寄。生。と。い。か。如。く。我。の。

言の信を以て依て昔今の名ある人の言を以て其言は他人小言
 小寓言の十言の中にて九言は人信を以て其言は寓言の十言にて九言
 の重言の尊貴の人の言は重言といふ是は十言の中にて七言は他人信
 ありて誠とて又危言といふ危は酒器を以て危は満るを以て傾き空を以て
 仰く多し是を以て人の無心して言は危言といふ又危は支あり其言
 を支離と言ふ的當とてさかす故に危言といふ扱此篇小言の
 寓言重言危言の事は發端小説出づ莊子惠子に孔子の事と
 して互小辨論し又衆の罔兩影小問て曰と珍説を以て罔兩
 影の外の微陰を以て是罔兩と影とが互小問答を以て道と論と又陽子
 居姓陽子居老聃の互小遇て陽子居以論を以て篇終る此篇小陳

人との事出たり曰今として禮義かくして以て人小先づらひ人倫
 の道なり人として人倫の道なきは是は陳人として人倫の道なきは猶論
 わましくも爰に略と

雜篇讓王第二十八

此篇の發端は堯天下を以て許由小讓る許由受む又子州支
 父小讓る子州支父曰我を以て天子と爲るとい宜しむるべし然れ
 ども我適小幽憂の病ありて方には是は治むるゆへ天下を治むるに
 暇ありて次の文は舜天下を以て子州支伯小讓る子州支伯も子州支父と
 同一言を以て辭退と故に天下を善卷といふ隱者に讓る善卷
 も受む深山小入て其處を知らむと舜すく天下を其友の石后の農

石戸作書り 小讓る 石后の 農も 妻子を 孤推す 海中に 入り 身を 終る ま
で及 右の 如く 堯王舜帝 世に 賢と 呼ぶ 隱者を 小讓る
の事わ 孤發端 故に 小讓王 号を

莊子曰 列子とい 賢者甚 貧窮あり 容貌甚 飢く
顔色か けこ 或は 容鄭の 宰相子陽 といふ 人も 言ふ 列
御冠 列子の 有道 士あり 今この 君の 國に 住居 して

貧乏困窮なる 此國の 君の 賢人を 好む 他國は 非
笑ふ 宰相子陽 といふ 此言尤 多し 主倉の
官人も 列子が 方へ 粟を 遺す 列子使者 に
見て 再拜して 曰某 貧乏なる 孤憐む 君より 粟を 賜ふ

ふい 有難 けこ 我の 貧を 其ど 隱者か 是の 如き 多く の
粟を 得て 却つ 迷惑 つま 種々小 辞退 した 使者 も
是非多 粟を 車に 乘て 歸る 時に 列子が 妻夫 鄭子陽 と
遺す 所の 粟を 受け 返し 心を 拊て 夫の 列子は 小い 心を
けい 妻の 聞傳 有道 の者の 妻子 とあ 皆佚 樂と 得る
然る 今是 の如く 貧乏 ありて 飢つ 此國の 君は 小い 心を
て粟 孤遺す 我夫 何ゆ 天の 賜を 受く 列子笑 して
曰此 國の 君は 自己 の列子を 知る 非ど 人の 言を 以て
て我 小粟を 遺す 若又 列子は 有道 の者に 似し 故に 君の 賜ふ
盜賊あり 言上 定めて 我を 罪に 納め 故に 君の 賜ふ

粟を受ざるものなり。其後鄭子陽の嚴酷政道を行ひたれば民多
く怨む。或時誤つて子陽が弓矢折者あり。必ず罪せざる事
を恐る。國人獒狗を逐と目て遂に子陽を殺せり。按子陽と西天
注疏小獒とを同く玉篇小獒と云
とのるあり音割つて々々天とあり

右の次の文は楚の昭王國を失ふ屠羊説走つて昭王に従ふの
事。原憲魯の環堵の室に居て子貢大馬小乘て原憲を見
の事。孔子顔回曾子の事。中山の公子牟と瞻子との問答次に
孔子陳蔡の間小窮するの事。又舜天下に孤北人無擇不護の
事。湯王桀を伐んとして平隨務光伊尹等に謀る。伯夷
叔齊の事。以て篇を終るものなり。

雜篇盜跖第二十九

孔子と柳下季柳下季の姓展名禽字季と云。菜を柳下に食む故小これと柳下季
といふと又云柳樹の下に居る故小号とと祖一柳下季と孔子とい相云とと百餘
年をわたりて友達と
といふは孔子の寓言なりと友あり。柳下季弟の名は盜跖といふ。發端は書
出せり。ゆへ此篇を盜跖といふなり。按此篇は右の柳下季弟乃
盜跖といふ者。九千人計の小盜を従て天下に横行し。諸侯を侵
暴し。室の樞戸を穴ち人の牛馬を馳。人の婦女を取て。金銀を貪り。
父母兄弟を顧む。をよゆ天國の城小入て守り。小國の保城小入て守り。
万民大苦。一むゆ孔子柳下季小謂て曰。先生は天下に聽る賢
人。多し。其弟として盜賊を爲し。万民を苦む。と云ふ。第一兄
の顔汚し。多し。我々の盜跖が方へ行て。我々の家の聖人の教五常五倫の。

三才圖會



三才圖會

舟之類



六

を奉るふ。天子の劔諸侯の劔庶人の劔の三劔を以て説く。
遂小趙の文王劔術を止るふ。劔士とて劔術を爲て文王小賞
玩せし者ども皆退けらる。事此一篇小説以て説劔と
一篇号せり。然し此篇小説柄とも爲て事か。右の三劔
の事。彼漢楚軍談ふる。事のわり。かとおやへる。然るや不
か。覺へて考へみる。

雜篇漁父第三十一

孔子。緇帷の林に遊びて杏壇の上に休坐と。弟子に傍小居て書を
讀む。孔子に弦歌して琴以鼓て曲を奉る。未と半少くする
に漁父わ。船を下て來る。鬢眉交白く被髮して袂を掄て原

より行て以て上陸小拒て止まる。龍の手にて膝を據へ右の手に
て頤を持て以て曲の終るを聴居ると。此篇の首小書出ると
以て此篇の号とせり。此篇の大意は。孔子天下に游行して詩書を講讀し。時小江濱の林の鬱茂て日を
蔽ひ。葉以布る。條を垂て帷幕の如く。かまは。是は緇帷の林と云
その處小杏の樹多き壇所小孔子休坐して琴以鼓て歌曲を
半へ漁父わ。船より下て來る。鬢眉交白く被髮して袂掄て陸
に止り。龍の手にて膝を據へ右の手にて頤を持て彼歌曲の終る
を聴居ると。

右の漁父の郭象が注。玄英が疏。小曰。漁父。越の相。范象蠹

なる。越王勾踐を輔佐して。吳王以亡。事訖て。乃扇舟り
 乘て。三江五湖に遊び。姓名を變易て。号して漁父とす。か
 り。屈原が逢ふ。漁父は是なり。故。莊子注疏。漁父とす。者
 あり。假名と洗けり。既。海。汎。びて。齊の國。小。至。て。鵝夷子
 と。魯。小。て。白。珪。先生。と。陶の國。小。て。陶。朱。公。と。述
 を。晦。し。先。以。韜。時。小。隨。ひ。變。化。し。と

子貢。子路の二人を招て。俱。小。對。坐。客。漁。父。孔子。以。指。指。て。曰。彼。何
 爲。者。と。子路。對。て。曰。魯。國。の。賢。人。君。子。多。り。客。漁。父。其。氏。族。を。問。ふ。
 子路。對。て。曰。孔。氏。多。り。と。客。漁。父。曰。孔。氏。何。を。治。者。ぞ。子路。曰。何。ぞ。應。じ。
 子貢。對。て。曰。孔子。性。忠。信。を。服。行。し。身。小。仁。義。を。行。ひ。禮。樂。以。飾。

人。倫。を。選。て。上。り。以。て。世。主。に。忠。あり。下。り。以。て。齊。民。を。化。し。將。小。天。下。と
 利。せん。と。是。孔子。の。治。所。多。り。と。客。又。問。て。曰。右。土。の。君。子。子。貢。が
 曰。非。右。土。の。君。小。あり。と。然。ら。ば。王。侯。の。輔。佐。と。る。卿。相。子。貢。曰。それ
 小。も。わ。く。と。客。漁。父。笑。ふ。て。還。ち。を。行。つ。て。曰。仁。多。り。と。仁。多。り。恐。く
 其。身。心。を。苦。め。形。孤。勞。し。て。以。て。其。真。二。の。靈。性。を。危。く。と。る。と。孤
 免。ま。と。鳴。呼。遠。り。を。其。真。一。の。旨。小。遠。ふ。さ。り。て。玄。道。小。分。離。を。る
 と。孤。と。を。去。る。子。貢。還。て。み。ま。の。事。以。孔子。に。報。け。ま。り。孔子。と。の
 中。琴。孤。推。や。り。起。て。曰。さ。そ。い。今。の。漁。父。聖。人。あり。と。乃。未。々。と。
 澤。の。畔。小。至。り。見。る。ま。り。小。彼。漁。父。挈。孤。杖。と。の。船。孤。引。ひ。と。と。
 顧。て。孔子。以。見。て。還。て。嚮。て。立。け。ま。り。孔子。走。行。て。再。拜。志。て。進。む。と

右の次の文の孔子と魯 漁父との問答して漁父孔子小
 真一の妙道を説示を孔子真一の昔弘大悟と子路孔子
 の漁父を敬ひるを弘見て曰萬乘の主天子千乘の君諸
 侯も孔子弘見ての敬ひ尊ぶるを弘ふ今我師の孔子の
 鄙る漁父小要弘曲め再拜したるやと孔子の曰其は
 きうか子路が大道を悟るるを弘ふ夫大道の萬物の由て生
 ずる所あり萬物も弘失ふ者の死を是弘得る者の生と
 事弘為とこと。是道小逆の敗る。これ小順の成る故小真
 一の大道ある所聖人こそ弘尊ぶ今この漁父の真一の大道
 を悟得る誠小真人といふ故小孔子何を能敬さるんと

のこすか

雜篇列御寇三十二

列御寇齊小行て中道ありて反て伯昏瞀人小遇ふと書出せ
 を以て篇の号とす此篇の始に列御寇と伯昏瞀人の答
 問を載朱評漫が龍を料理とす術を支離益小學んで千金
 の家弘賣盡し三季やと志て術のありとことと遂小益小くぬ
 との事弘引彼至人の精神を無始小歸し無何右の卿小耳瞑
 の文あり又宋人曹商といふ者宋王の使として秦の國小往小車
 百乘を秦王曹商小賜ふ宋の國小歸て莊子小夸ていふ我
 の貧乏ありて屨を織て世を渡る我短とする所なりと云ふ

秦の大王を悟ちて車百乘を賜ふ其長しき智恵の爲
 とらんとす。莊子曰彼秦王の病なり。醫者を召に醫者秦王乃
 癱を破り座を潰と者。車一乘を賜ふ痔を舐と者。車五乘
 を得たり。其病の下なる。治とらぬ。車を賜ふと多しと聞
 け。汝に定て秦王の痔疾を治したるものありん。何車を賜ふその
 多とやと耻とわく。世小事下して功高く功高くして禄重く威
 勢を多く人を諭すと

莊子曰死せんことを弟子共厚く葬らんことを。莊子曰吾天地を以て
 棺槨と爲し。日月を以て連壁と。星辰を珠璣と爲し。萬物を以て
 齋送と。吾葬の具皆備たり。何をこの上よかんと。と。弟子の

曰吾等鳥や鳥の夫子。莊子曰吾天地を以て。莊子曰地の
 上小葬をい鳥や鳥の食と爲す。定むる事あり。然とて地の下小葬
 する。螻蟻の食と爲す。彼鳥や鳥の食を奪ふて地の下の螻蟻の食
 と爲すと。何を其偏多とす。

按ふ小列仙傳卷一。小列子。鄭人名。御寇。道。關尹子に問とあり。
 雜篇天下篇第三十三

天下に方術を治むる者多し。皆其有爲を以て。加ふべし。と書出
 ず。故以て篇の名とす。此方術とす。方とは道との事。ふて上古神
 農黃帝より。堯王舜帝の聖代。其道をの万民を治むるの術。はとの
 爲す。有所を爲す。是を真爲とす。真爲。無爲なり。此ふ何を

加へん古の聖代淳樸無爲なる方民其情不随ひ其性不順
 して敬言戒を加へて教へるも爲るとも爲るとも然る未
 世不至つて上下の人民邪曲めて無爲の道術して治め難
 爰不於て莊子えり。疑問を設けて曰古の道術果して何
 在と問うけて自答て曰清浄無爲の玄道在るとの事か。人々
 目前小周徧せり古より今不至つて在るとの事か。又
 自問して曰神何小由て降る明何小由て出聖生る所わり王成
 所のり皆小原く宗以離る之を天人といふ精を離る之を神
 人といふ眞以離る之を至人といふ天を以て宗と爲し徳を
 以て本と爲し道を以て門と爲し變化不兆と之を聖人といふ仁

を以て恩と爲し義を以て理と爲し禮を以て行ひと爲し樂を
 以て和と爲し董然として慈仁の之を君子といふ
 右の神何小由て降る明何小由て出るとの略意をいひ
 神とて萬物小靈妙めて測り知るべしと明とて一切萬事不於て普
 く通し智惠發明る事明鏡の如き以て是を以て上古の聖帝
 天下の方民を生育し。往昔の明王天下の政事以成して其方民の情
 性不随順し。教へて爲るとも虚通の聖道を以て天下泰平
 に國家安寧するは皆小原く

右皆小原くといふ郭象白物を以て各其根不復しと抱
 ちしもの外を飾るるをかし。斯聖帝明王の方民を生育

一。政事成就のゆゑ多かるくと。玄英が疏小曰原く本あり。
 一とら道あり。復降靈と雖も物を接し迹を混し。光と和
 び物小應む。真を離れ常に一を抱きて本小歸する者な
 り。右の疏の意は皆一原くとす。皆と上古後代の聖帝、
 明王及び神仙聖人至人天人等皆何を由所と何
 を由處として出現するを。聖帝の万民を生育するを。明
 王の政事成就するを。何を以て爲した事と。其根本を
 みるに見るふ。更ふ別の物ふわくと。皆清浄無爲。真一を以て。
 根本と爲し。故小一原く。とす。故小原の本あり
 と。一と真一の大道方る故小一と道ありと。復降靈とと。

もと神明の世に靈を降臨し。万物小。接り迹を
 混し。神明方る。常人の如く。聖迹を凡人と同く混り。
 光を和げ。一切万物小。相應して。神明神仙聖賢の境界は。
 爲し。雖も。真を離れ。常小真一を抱きて本に歸
 する者あり。真一を抱く。抱く。掬と回掬と訓む。其
 人々小具する所の真一を兒を抱き物を持つが如く。大切小
 爲して常々其根本の真一小歸するやうに爲し。多かるかと
 歸する。真一の故郷へ歸する。小同ト
 右の次の文此真一を本と爲し。天下は治め。國家は平小する
 の事を論じ面白き文多し。長文といひ。元來この撰述の意

趣しゆ其大略そのとらを解げ。圖畫とが以もつ加かて童蒙どうもうの睡眠ねまを覺さるるの事こと方かたと唯ただ簡易かんいめして其大意そのたいいを述のるは要ようと。卷數短せんすうたんく紙數限しすうげんわと其詳つまひら多おほ事能ことあたいど偏ひん不ふ完くわんを以もつて天狐てんこ闕くわひ彘しを以もつて海うみを測はかるは似から。覽みる人ひと予よ碩鼠せきその能あたを呵あらざる事こと方かたと志こころす

江国えのくに瀨文せぶん坡か 往年いぜん日向國ひなたのくに都郡とぐんの山中やまのちゆう小函せうくわん居いり時とき異人いじん小神仙せうせんぜんの至いた道みち唯ただ清淨せいじやう無な為な真一まいつの靈れい音おん以もつて諸人しよじん小教導せうかうどうと九三拾八年くわんさんじゅうはちねん已來いらいてよる普あまく此真一このまいつの事こと以もつて諸人しよじん小教導せうかうどうと九三拾八年くわんさんじゅうはちねん已來いらいから若仙わくせん教まをふ志こころす君子くんしわらふ予よ草舎くわしや來臨らいりんせよ為な小説せうせつ示しは

莊子繪拙大尾

書并畫圖

洛西

下河邊拾水



天明四甲辰年初春

本石町十軒店

山崎 金兵衛

高麗橋一町目

淺野 弥兵衛

堀川通綾小路下町

錢屋庄兵衛

堀川通佛光寺下町

近江屋庄右衛門

三都書林

